令和２年度秋田県総合政策審議会第３回ふるさと定着回帰部会（議事要旨）

１　日時　　令和２年９月８日（火）１３：３０～１５：３０

２　場所　　秋田地方総合庁舎　６階　６０７・６０８会議室

３　出席者（敬称略）

【ふるさと定着回帰部会委員】

加藤　未希（合同会社ＣＨＥＲＩＳＨ代表社員）
須田　紘彬（株式会社あきた総研代表取締役）
竹内　健二（株式会社ＬＨＬ取締役）
能登　祐子（能代市自治会連合協議会会長）

【県】

石黒　道人（あきた未来創造部次長）
久米　　寿（あきた未来創造部次長）
水澤　里利（あきた未来創造部あきた未来戦略課長）
佐藤　裕之（あきた未来創造部あきた未来戦略課政策監）
三浦　卓実（あきた未来創造部移住・定住促進課長）
信田　真弓（あきた未来創造部次世代・女性活躍支援課長）
新号　和政（あきた未来創造部次世代・女性活躍支援課政策監）
橋本　秀樹（あきた未来創造部地域づくり推進課長）
村田　詠吾（企画振興部市町村課長）
千葉　圭司（健康福祉部国保・医療指導室長）
鈴木　慎一（建設部技術管理課技術管理監）

４　あいさつ（石黒あきた未来創造部次長）

・　今回、本部会も３回目を迎え、ふるさと定着回帰部会としての提言をまとめる回となると思うので、よろしくお願いする。
・　委員の皆様からの提言については、県の来年度当初予算などにできる限り反映していきたいと考えている。これからの新しい時代に向けて、様々な視点からの御意見を賜るようよろしくお願いする。

５　議事要旨等の公表の際の氏名の取扱いについて

●須田紘彬部会長

・　審議の前に、委員の皆様に御了解をいただきたいが、審議内容は、議事録として県の公

式Ｗｅｂサイトに掲載される。その際、委員の名前は特に伏せる必要がないと思うので、公開したいと考えているが、よろしいか。

【異議なし】

●須田紘彬部会長

・　それでは、そのようにさせていただく。

６　議事

（１）　ふるさと定着回帰部会の提言について

●須田紘彬部会長

・　では、議事に入るが、議事の「（１）ふるさと定着回帰部会の提言について」ということで、今回は、部会として提言をまとめていかなければいけない重要な回となっている。
・　これまでの議論等を踏まえ、事前に事務局から提言案が示されているが、いまひとつ具体的な提言が足りないのではないかという点や、改めて委員の皆様の意見を伺ってみたいことを私から提示させていただく形で内容を固めていきたい。
・　部会資料－１「提言書（案)」の１ページの提言１は、「若者や女性の県内定着・回帰と関係人口を生かした取組の促進」について、１．特に若年女性の県内定着・回帰については、統計的なデータを活用することや、個人のライフステージの局面を捉えた適時・的確な対策を講じていくこと。２．若者の県内定着・回帰促進を図るため、高校生や大学生に対する県内企業とのマッチング機会の拡大に加え、早い段階から県内就職に向けた意識醸成を図っていくことや、県内企業の情報発信力や学卒等の採用力の強化を図っていくこと。３．新型コロナウイルス感染症の拡大を契機に、リモートワーク等の新たな働き方が急速に普及していることから、こうした変化を本県への移住や回帰の回帰の拡大につなげるような取組を行うこと。また、県外へ転出した方が秋田へ戻ってくる契機を探る機会として、関係人口の取組も参考に検討すること。４．様々な情報発信の際には、対象者を明確にすることで、より多くの方々の強い関心が得られるよう工夫すること。の４点を提言しようとするものである。
・　これらの提言について、文言としてより適切な表現があるのではないかとか、具体的な事例を盛り込んだほうが分かりやすいのではないかとか、微妙なニュアンスの強弱の付け方とか、そういったことに関して、皆様から御意見を頂戴したい。

●竹内健二委員

・　項目２の中に、「若者が就職先を検討するに当たっては、賃金や福利厚生などの勤務条件に加え、ワーク･ライフ・バランスなどの働きやすい環境を重視する傾向があることから」という一文があるが、「やりがいのある魅力ある仕事」という観点が抜けている

のではないか。小さな企業は、賃金や福利厚生の面だけで大企業と競うことは難しいので、「やりがいのある魅力ある仕事」という観点がなければ、県内中小企業が「よし、がんばろう。」という意欲を持って情報発信することは難しいのではないか。

●須田紘彬部会長

- ワーク・ライフ・バランスという言葉の捉え方は、結構、多様だと思っている。竹内委員は、どのように捉えているか。

●竹内健二委員

- 私は、ワークとライフは一緒であってバランスをとるものではなくて、究極的には自分の中で一体化している。仕事自体が自分の生活の一部だし、普段の暮らしを送っている中でも仕事に生かせそうな何かを得たりしている。私自身が経営者だからかもしれないが、どちらの時にももう一方のことを忘れてはならないものだと思っている。特に中小企業にあっては、そうではないか。

●須田紘彬部会長

- 加藤委員は、ワーク・ライフ・バランスという言葉をどのように捉えているか。

●加藤未希委員

- 子どもを産む前は、朝早くから夜遅くまで働くことも厭わない感覚であったが、子どもを産んでからは、子どものことを優先する考え方に変わってきた。子どもが幼稚園、小学校と進むにつれて、「子どもが不在の時間帯に少し働こうか」という考えが出てくる。仕事を探す上では、自分の生活の中で無理をしないで働くことを第一に考えている。私の周囲の方々からも同様の話を聞いている。
- 資格を持っている母親たちも多い。その資格を生かして無理のないペースで働くケースが多いと感じている。

●須田紘彬部会長

- 資格の勉強をしている時間は、プライベートな時間なのか、ワークの時間なのか、どちらだと思うか。

●加藤未希委員

- 私の周囲では、子どもがまだ寝ている早朝か、夜、寝かしつけたあとに資格の勉強をしている方が多いと認識している。
- プライベートか、ワークのどちらかと問われると答えるのは難しいが、私も経営者でもあるので、休みの時に仕事のことを考えてしまうこともある。ただ、楽しみながらやっ

ているので、バランスはとれていると思っている。

- 周囲の働く母親たちも、仕事と生活のバランスをとりながら、もしくは、とろうとしている方が多いと認識している。

●竹内健二委員

- 女性の働き方の神髄を見たような気がする。一言で言うと、ものすごく一生懸命だし、限られた時間の中できちんと仕事をしたいし、生活もしたいという方が多いような気がする。
- 私が実際に知っている事例で、育児をしながら短時間勤務している中で、定時には退社しなければならず、仕事をやりきれないという状況に責任を感じて涙するというようなこともあった。
- 新型コロナウイルス感染症の拡大の影響で、会社も経営が大変な時期であり、社会全体でも雇用が少なくなっているのに、自分が雇用されていて良いのだろうか、自分は会社に対して責任を果たせているのだろうかという思いを抱く女性もいると聞く。
- 女性が働きやすい環境を整えれば、短時間勤務でも成果を上げられるし、経営者側から見ても一生懸命貢献してもらっているという捉え方ができ、好循環が生まれるのではないか。

●須田紘彬部会長

- 我々はどうしても就業者の視点に立ってしまうし、本部会からの提言もそちら側の視点が主で、企業側の視点は産業振興部会の所掌分野になると思うが、双方歩み寄りが必要なのだと思う。
- ワーク・ライフ・バランスという言葉については、浸透してきたがゆえに一人歩きしている面もあると思うので、言葉の定義を整理した方が良いのではないか。
- 私個人としては、ワーク・ライフ・バランスは、ワークとライフの相乗効果だと思っているので、仕事で知り合った人脈をプライベートでも何か生かしてもらうとか、休みの日に会った人と仕事を何か一緒にできるかもしれないといったことがあると思う。そういういろいろなつながりの中で、どう生きたいのか、どう人生を過ごしたいのかということが考えられるような取組、そこに秋田の強みが生きてくるのではないか。
- 提言の項目４番の情報発信について、対象者を明確にするということは、対象者を絞るということにつながるのではないか。

●能登祐子委員

- 提言の項目４番に「対象者を明確にする」という表現があるが、年齢層のことか。どういった意味か。

□事務局（加沢副主幹）

・ 前回の会議で、竹内委員と須田委員から、主に婚活イベントの際の集客に関する議論の中で、広く募集するのが通常の手法であるが、対象者をある程度具体的に思い描いて明確にすることで、広く浅く募集するよりも、より強い関心を持った方がたくさん来てくれるというようなこともあるのではないかというお話がございましたので、その内容を盛り込んでおります。対象者を明確化することは絞り込むというニュアンスも入りますが、それによって逆にたくさん来ていただくことにつながるというような話であったと理解しております。

●竹内健二委員

・ 前回の議論の中で「チョコレート・ナイト」や「お酒を楽しむ会」といった事例について、興味や関心を絞ってという話をした際の発言だと思うが、現在の表現だと限定するというニュアンスが強すぎるのではないか。

●能登祐子委員

・ 「若者」とか主語的なものが付かないと分かりにくい。私が取り組んでいる「朝市」や「マルシェ」ではいろいろな人に来てもらいたい。「若者対象の情報発信、イベントを行うに当たっては」とか、付けたほうが分かりやすいのではないか。

●須田紘彬部会長

・ 多分ここでは、年齢というよりは、地域全体とか、関係人口といったところに係ってくると思う。

●能登祐子委員

・ 若者ということではないのか。

●竹内健二委員

・ 提言書案の３ページの表現では、「対象者の性質を細かく分析し」とある。

●須田紘彬部会長

・ マルシェであれば、マルシェで買いたい人というのはどういう人かを明確にするということだと思う。年齢とか性別だけじゃなくて、興味、関心レベルでどういう人がターゲットになるかという話だと思う。スーパーで買えば良いと思っている人は来ないだろうとか、買ってもらうという観点からすると、来場者数だけではなくて、売り上げとか、購買者数とか、面白そうだから来ただけという人ではなくて、買う人はどんな人かという想像が必要になってくる。

●能登祐子委員

・ 購入目的なども重要になってくる。そういった表現がどこかに入れば良いのではないか。

●須田紘彬部会長

・ この項目の４番は、３ページの文章を持ってきたほうが、ある程度具体的になって分かりやすいのではないか。

●能登祐子委員

・ 同感である。

●加藤未希委員

・ 今の議論の内容は、そのとおりだと思う。

●須田紘彬部会長

・ 前回の会議の補足になるが、来場者数を増やしたいとすれば、コンテンツを増やすことになると思う。マルシェに関して言えば、子ども向けにかき氷を売るとか、年配の方向けに落語をやるとか、一つのイベントの中でもいろいろな層に向けたコンテンツを細かく作ってあげると、結果的に一つのイベントに多数の来場者が来るということにつながるということだと思う。今の表現のままだと対象者を絞ったのにたくさんの人が来るように受け取れ、矛盾しているように感じる。

●能登祐子委員

・ 同感である。相反するように受け止められるおそれがある。

●須田紘彬部会長

・ ただ、３ページの文章を読むと、少し意味が分かってくるので、持ってきたほうが、ある程度具体的になって分かりやすいのではないか。

●能登祐子委員

・ 同感である。そのほうが分かりやすい。

●須田紘彬部会長

・ ほかに、要素としてこういうを付け加えた方が良いのではないかといったことがあれば、御発言ください。

●能登祐子委員

・　今、若年女性の中で、シングルマザーが増えているのではないか。県外の事例でシングルマザーへの支援を手厚くしたことで移住が増えたということがあったと認識している。提言の中にそういった要素を入れ込んではどうか。

●須田紘彬部会長

・　そういった方々においては、幼稚園や保育園に預かってもらう時間も長くなるだろうから、結果的に延長保育などにお金がかかり、世帯として使えるお金が減ってくる。加藤委員は、そういった事例はご存じないか。

●加藤未希委員

・　実家が近くにある方は、おじいちゃん、おばあちゃんにお願いして保育園への送迎をしてもらったりできるが、そういう頼れる人がいない方については、一時預かり制度の充実や、一人で負担を背負い込まないような周囲のフォローが必要なのではないかと思っている。

●能登祐子委員

・　地域でサポートできるような体制があれば良いのだが。

●須田紘彬部会長

・　どのようなフォローがあれば良いか。

●能登祐子委員

・　今は、おじいちゃん、おばあちゃん向けの講座で、孫育て講座みたいなものがあるが、シングルマザーへの支援に関しては割と触れられていない。地域に小さな拠点を作って、一時預かりや地域の皆でサポートする仕組みがあれば良いと常々考えているが、具体化がなかなかできないでいる。

□信田真弓次世代・女性活躍支援課長

・　シングルマザーも含めて考えていきたいと思っているが、秋田へ戻るタイミングを含めて個人のライフステージには様々な局面があることから、部会資料－１の２ページの具体的な取組の方向性の１の一つ目の○の２行目に、あまり事細かに表現せずに「ライフステージの局面を捉えて」と記載している。

●須田紘彬部会長

・　今の話は提言２にも関連してくる事柄だと思うので、提言２へ議題を移行する。提言２

の１番から４番まで、表現やニュアンス、強調すべき点等について、御意見等あればいただきたい。

・　男性や父親に対する観点を入れ込んだほうが良いと考えるがどうか。

●加藤未希委員

・　子育てに関しては男性側の手助けが重要である。一般的には、どうしても子どもと関わる時間は女性のほうが多いので、女性側、母親側の観点が多くなるが、今は子育てに積極的な男性も多い。最近は父親が保育園の送迎に来るケースも多いし、「ママ」と呼べるくらい子育てに関わっている男性も多くなってきたと感じている。

・　そういった現状からも、男性や父親に関する記述が盛り込まれたほうが良いと思うし、そういった父親を見て育った子どもがまた、同じように自分も積極的に子育てに関わるという婚循環も生まれるのではないか。

●竹内健二委員

・　私は、あまり「男親として」という意識はなく、どれだけ子どもたちと楽しく過ごせるかという考えで接している。釣りの趣味が合う三男とはよく釣りに行くが、満遍なく子どもの面倒を見なければという考えはなく、ごく自然にやっている。役割意識が強くなり過ぎると良くないと考えている。その分、妻には負担を掛けていると思うが。仲良く楽しく日々過ごせれば良いのではないかと考えている。

●須田紘彬部会長

・　能登委員は先ほど、地域で子育てをサポートすることについて考えを述べられていたが、婚姻率や出生率を上げるためにどういう取組が有効か、何を大事にするべきだと考えているか。

●能登祐子委員

・　年齢関係なく、関わることが大事。今の若者は、人や地域との関わりを持つことが下手だと感じている。それをどのように改善していくかが課題ではないか。私は日頃、そういった関わりを増やしていくような活動をしているのだが、独身の方が来てくれることもあるし、中にはそういった活動の中で出会い、結婚した例もある。そういう自然な流れの中で婚姻率が上がればいいのだが、なかなか難しい。

●須田紘彬部会長

・　自然な流れで婚姻率が低い今の状況になったと思うので、何かしなければと思うのだが、それがなかなか難しい。

●能登祐子委員

- 私の身近な独身者の事例でも、お見合いを勧めたり、良い相手を紹介すると言っても、本人は絶対に拒む。「自分で考える。」と口では言うが、実際に行動しているようには見えない。どのようにしたらいいのか、私自身大変悩んでいる。昔と違って独身者自身が自分の年齢を気にしなくなっていることも問題だと感じている。当事者でない周囲の人間としては、出会いの機会を増やして、当事者自身の目で良い人を見つけてもらうとか、社会における自身の状況に気づいてもらう必要があると感じている。
- 現在、新型コロナウイルス感染症の拡大の影響もあって、都会から地方へ移住してくる若い人が増えていると認識しているが、地域社会の人たちとコミュニケーションがとれない人が多いと聞いている。都会ではあまり周囲の人とコミュニケーションをとる必要がなく、自身を守ることを中心に考えて暮らしてきたことが影響しているのではないかと思うが、そのため、せっかく移住してきても周囲になじめずにまた都会へ戻る事例があると聞いている。大変重要な課題であると認識しており、改善するためには受入側の地域の人たちがそういった点に配慮して接する必要があるのではないかと考えている。思いやりの心を持って接することはとても大切だと思うし、そもそも都会から移住してくる人たちはそういった温かみを求めて移住してくるのではないか。
- 能代市の中心部から１０分か、１５分くらい離れたところに住んでいた方が、不便だからと手放した住居が都会の若い家族にすぐに売れたという話を聞いた。田舎暮らしに興味を持つ都会の若者が増えていると感じる。高齢者にとっては不便な土地でも、若い夫婦にとっては、自然豊かで伸び伸びと子どもを育てられる良い環境と捉える人もいる。秋田県には空き家もいっぱいあるし、畑や田んぼをセットにして提供できるようにしてはどうかと考えている。

●須田紘彬部会長

- 地方では東京で働き、暮らすということは、一つのことを専門的に突き詰めるという面が強く、地方では何でも広く浅くできる必要性があり、東京で専門性を高めてきた人が秋田に移住してきた際に、そういった状況に順応できずに早期離職するといった事例を聞いたことがある。
- 移住の観点からすると、多様性がキーワードではないかと思うが、移住情報の発信の際には、いろいろなことに興味がある人を想定して情報発信することも大事ではないか。
- 結婚に関する話でも、やはり多様性がキーワードになると思う。これは母親の仕事、これは父親の仕事と決めつけたり、母親の仕事を父親が手伝うという表現ではなくて、各家庭のあり方が多様だということを伝えた方が良いのではないか。
- ある家庭では、従来型で女性が家事を行い、男性が仕事を頑張るという家庭があっても良いし、その逆があっても良い。各家庭の中でバランスを保ち、パートナーと相談して決めるということが言えないといけないのではないかと思っている。

- 結婚する前にもそういった価値観のすり合わせをして結婚してもらうのが良いのではないかと思っている。趣味等の価値観も大事だが、料理はどっちが得意なのかとか、洗濯を干すのが得意なのか、畳むのが得意なのかといった、家庭生活に関する価値観のすり合わせできるようなマッチングの機会があっても良いのではないか。
- 一概に「女性がもっと仕事をすべきだ」とまで言ってしまうのはいかがなものか。仕事をしたくない人もいるだろうし、各家庭で価値観に違いがあったりするであろうから、家庭内の価値観のすり合わせの話から始まって、夫婦のあり方すら多様であるということを表現したほうが良いのではないか。

●能登祐子委員

- 大変良く分かる。

●竹内健二委員

- 多様性に配慮する観点から言うと、提言としては表現がすごく難しくなると感じている。項目の１番の「もっと産みたい、育てたい意識が醸成される」という言葉に過敏に反応する人たちもたくさんいると思う。本当に言いたいことはこういうことなのだが、この表現に反発する方々もいると思う。
- 項目の２番でも「幸せの形も人それぞれであるが」の次には、本当に言いたいこととして、「結婚や子育てを経験しないとわからない幸せがある」ということが書いてあるのだが、こういう表現をしてしまうと結婚や子育てをしている人が優位で、していない人が劣っているような受け取られ方をしてしまいかねないので、このテーマは表現が難しいと思う。
- 項目の３番に関しても、「第２子以降の出産割合が首都圏や大都市圏に比べて高く」と書いてあって、このこと自体は大変良いことだと思うが、「であるから婚姻数を増やせば出生数が増える」という論理は、本当にそうなのかと思ってしまう。子どもはたくさんいたほうが楽しいと感じ、第２子以降を産み育てる方々がいる一方で、第１子でもう十分だと思っている方々もいて、このことについては実は意見が二分されているという側面を見ていないと、提言を受けて施策を実施したが、前提が違っていたということになりかねない。婚姻件数を増やす取組はやらなければいけないと思うが、項目の３番の前半と後半の関連性については、慎重に考えなければいけないのではないか。

●須田紘彬部会長

- 同感である。直接的に言い過ぎると、響かないばかりか反発心が生まれてしまうということもある。ほかに何か良い表現はないか。
- 提言自体は、県の中で事業を作るときにコンセプトにするというニュアンスで良いか。それとも県民に向かって発信するというニュアンスもあるのか。はたまたその両方が

あるのか。

□久米寿あきた未来創造部次長

・　まずは行政機関としての県に対する提言という位置づけである。

●須田紘彬部会長

・　そうなると、現在の表現も許容される面もあるかもしれないが、事業目的として対外的に打ち出す際には、やはり表現に気をつけなければならないということになると思う。能登委員はどのようにお考えか。

●能登祐子委員

・　大変難しい問題である。

●須田紘彬部会長

・　「もっと産みたい、育てたい」という話に関して、複数の子どもがいらっしゃる立場として加藤委員はどのようにお考えか。

●加藤未希委員

・　私の場合は、一人目の子どもができたときは子育てが本当に大変で、「２人目、３人目など考えられない」というほうだった。また、地元の友人の中で一番早く出産したので、相談できる相手もいないし、どんどん子育てに疲れ切った母親になっていき、服も常にパジャマだし、髪もボサボサで化粧もせずにいて、その姿を見た周囲の友人たちに、「そんな風になりたくないから子どもを産みたくない」と思わせていた側であった。
・　子どもが言葉を話すようになって少し落ち着いてきて、「やっぱり弟妹がほしいな」、「２人目がほしいな」と思うようになった。その後、チェリッシュを運営することになって色々なママたちを見て、「こういう育て方があるんだ」と感心したりしたことで、自分の考えがどんどんポジティブになっていき、もう一度、子育てをしたいという思いが強くなっていった。
・　楽しく子育てできるようになったことで、以前は私の姿を見て「そんな風になりたくない」と言っていた友人も、「すごい子育て楽しそうだね」、「私も早く結婚して子どもを産みたい」と言ってくれるようになった。
・　私の場合は、周囲のママたちを見て、もう一度、子育てをしたいという気持ちが強くなった。実際にそういうママたちを見ることで、もう一人産むイメージもしやすいし、ポジティブな気持ちにもなりやすいのではないかと思うが、周囲にそういう環境がない人はそのようになりにくいかもしれない。そういう環境に触れるためには、外に出て行かなければならないが、子育てで大変な時期に外の世界に出て行くこと自体が難しい

ということもあると思うし、私の周囲にはポジティブに考える人が多いが、全ての人がそうなるとは限らないので、どのように提言書に表現するかはとても難しいと思う。

●能登祐子委員

・ 項目の２番に「ライフスタイルの多様化等により」と「幸せの形も人それぞれ」とあるが、そうした価値観や生き方を尊重するという趣旨の一つ別立ての文章にして、後段のロールモデルとして発信するという趣旨を、１番に持っていってはどうか。項目の２番の前段と後段は一つの文章にするのは無理があるような気がする。

●須田紘彬部会長

・ 加藤委員の意見を聞いていて感じたことが２つある。まず１つは、ママ同士、若しくはママと未婚の女性との交流を図る中で、生き生きと子育てをしているママたちの姿を見せていくことが必要ではないかということ。もう１つは、そうした中になかなか入り込めない方々を少人数の規模で集める交流の場を数多く設けてはどうかということである。
・ 一時預かりの理由を仕事だけでなく私用も含めて対象とすることにより、預けやすい雰囲気づくりも必要ではないか。その場合は、平日だけでなく、土日の一時預かりも拡充したほうが良いのではないか。
・ 項目の４番についてだが、加藤委員の周囲の状況としてはどうか。

●加藤未希委員

・ 「子育て中には、自分の親など周囲との子育て方針の違いなどから、心理的ストレスを抱える」との記載があるが、今は親と同居している事例も少なく、実際にはあまり親との関係性の中でこういう状況はないのではないか。むしろ、支えてくれる人がおらず、時間に追われる中で感じるストレスが多い。

●竹内健二委員

・ 子育てそのものや仕事との両立に関して、自分の理想とのギャップからくるストレスや、共感してくれる人がいないことがストレスにつながる例が多いのではないか。

●加藤未希委員

・ 話を聞いてくれる人がいるだけでも大分違う。
・ 私の周囲の例では、両親と同居をしてみたが３ヶ月で解消したという事例もあったので、項目の４番に記載されているようなこともあるのだと思うが、どのくらいの割合でそういった事例があるのかは疑問である。また、祖父母側の意向として、子や孫との同居は望まないということも結構あるのではないかと感じている。

●須田紘彬部会長

・　それでは、項目の４番については、単独作業による忙しさや時間のなさからくるストレスを主とした書きぶりに修正するということでどうか。

【異議なし】

●須田紘彬部会長

・　それでは、議題を提言３へ移す。提言３では、項目の１番として、女性が働きやすい職場環境づくりを主として進めつつ、女性自身の起業も選択肢の一つであることから、その際の資金調達や経営指導など、伴走型で支援する仕組みを整えること、項目の２番として、若者が活躍するための支援制度を拡充し、次代を担う若者が自ら地域を活性化する取組を促進するような環境を整備していくこと、項目の３番として、リモートワークや在宅勤務等の多様な働き方については、企業の生き残りをかけた取組の中で働き方を変えていかないと、いい人材も確保できないし、会社としての生産性も上がらないといった視点をもって経営者の意識改革につながるような取組を進めること、の３つを提言しようとするものである。

・　これらの提言について、文言としてより適切な表現があるのではないかとか、具体的な事例を盛り込んだほうが分かりやすいのではないかとか、微妙なニュアンスの強弱の付け方とか、そういったことに関して、皆様から御意見を頂戴したい。

●竹内健二委員

・　「好き」とか、趣味を生かしてスタートしている方々の中から、もっと事業を進めていきたいという意欲のある人にエントリーしてもらって、その中から選定した人をきめ細かくサポートしていくイメージである。その事業の中では、自らの働き方は自ら決めることができるので、子育てと仕事を両立する働き方を自ら決めることができると考えている。そういった形の成功事例を多く作ることができれば良いのではないかと考えている。

・　想像だが、そうした女性の起業者同士はあまり競争することなく、むしろ、「一緒に何かできないか」といった形で、地域を活性化していくのではないかというイメージがある。

●須田紘彬部会長

・　金利・手数料を安く資金調達ができるとか、補助金が少し多くもらえるとか、いろいろな支援の形があると思うが、竹内委員は、女性に対する今までの支援制度の中で足りないところはどういったところだと考えているか。

●竹内健二委員

・　支援のきめの細かさが必要だと思う。金利が安くなるといった優遇措置があっても、それをどうしたら受けることができるのかが分からないとか、事業計画書の書き方が分からないといった事例が多いのではないか。実際の申請窓口となる商工会などでは、丁寧に助けてくれる担当者もいれば、そうではない人もいる。そういった部分を一歩踏み込んで助けることができれば、もっとやれるのではないか、もっと花開くのではないかという人たちがいっぱいいるのではないかと思う。

●須田紘彬部会長

・　加藤委員は、どういう支援制度があれば、安心して起業したり、事業を進めることができると考えるか。

●加藤未希委員

・　私自身、経営のことなど何も知らないところからスタートした。まだ一年半くらいしか経っていないが、最初は、どこに行けばいいのか、誰に聞けばいいのかも分からない。何でも相談できる、相談内容に応じて専門家を紹介してくれるといった機能を持っていて、信頼できるところがまず最初にあれば、安心してスタートすることができるのではないか。

●能登祐子委員

・　伴走型の支援というのは大変良い。自治体などの行政機関と関係機関が伴走型で支援することが望ましい。できれば起業の窓口的なところが各市にあると良い。

●須田紘彬部会長

・　県と市町村には、それぞれ役割の違いもあると思うが、その辺りの機能がワンストップになればいいということか。

●能登祐子委員

・　様々な事柄を一番分かっているのが行政機関であると思うので、そういったことを一括して教えてくれる、スムーズでスピーディーなワンストップ機能があれば良いのではないか。

●須田紘彬部会長

・　それは多分、女性の起業の話だけではなくて、市民生活の全てに関わってくることだと思うが・・・

●能登祐子委員

・　そのとおり。全てにおいて、そのような体制が望ましい。

●須田紘彬部会長

・　１番と３番については、大分、内容を詰めることができたと思うが、２番について、もう少し具体性があったほうが良いのではないかと思うがいかがか。「具体的な取組の方向性」を見ると、資金調達の話が主となっているが、ほかにどのような支援があれば良いか。

●能登祐子委員

・　県外で得てきた知見や技能を生かして、ふるさとの活性化に役立つ取組にチャレンジしたい若者はたくさんいる。何をするにしても資金は必要になるので、行政と金融機関の連携が大事ではないか。

●須田紘彬部会長

・　チャレンジする若者は増えていると思うが、なかなか台頭しないというか、活動を始めては立ち消えするという事例が多いのではないかと感じてる。どのようにすれば、そういった活動が継続的な取組になるのか、そういったところに対する支援が必要ではないか。地域が継続していくためには、そういった若者の活動が継続していくということも必要だと思う。

●能登祐子委員

・　そういった若者の活動をＰＲすることは、行政にもできるのではないか。

●須田紘彬部会長

・　能登委員の周囲の状況として、若者が何かにチャレンジする事例はあるか。

●能登祐子委員

・　最近の話としては、大きな酒屋をリノベーションして商店街を活性化する取組を地元の若者が中心になって進めているし、駅前の空き店舗を活用してプラネタリウムを見ながらヨガができる施設を作って地域を活性化する取組を地域おこし協力隊の方が進めている。
・　ほかに知っている事例では、新しく店を開くために空き店舗を探しているが、空き店舗を一元的に把握できないので困っているという話を聞いた。また、空き店舗の改装までは資金を工面できるが、その後の運営資金が厳しいといった声も聞いている。
・　以前よりもチャレンジする若者が増えていると感じている。一番すごいのは五城目の

馬場目地区だと思うが、そういった形になっていってほしいと思っている。

●須田紘彬部会長

・　能登委員から今紹介された事例は、地域活動としてやっているのか、それとも起業としてやっておられるのか。

●能登祐子委員

・　起業として取り組まれていると認識している。

●須田紘彬部会長

・　そうするとやはり、資金調達に加えて経営的な視点が必要になってきて、補助金等で支援するにしても何年後かには経営として自立しなければならないと思うので、項目の１番と同様のニュアンスになると思う。経営視点、地域活性化視点で伴走型の支援が必要ということになるのではないか。

●能登祐子委員

・　同感である。そういった支援が地域活性化、地域づくりにつながっていくと思う。

●須田紘彬部会長

・　提言３に関して、ほかに御意見等ないか。

【なし】

●須田紘彬部会長

・　それでは、議題を提言４へ移す。
・　提言４では、項目の１番として、まちづくり、地域づくりは住民主体で行うべきであるが、持続的に発展する地域や人、若者同士の繋がりを重視して住民目線で寄り添った支援を行うこと、項目の２番として、地域づくり活動には若者支援や出会いの場の創出といった婚姻率の向上等にも関係してくる要素もあることから、そうした支援を組み合わせて継続的な活動となるよう支援すること、地域づくりにおいては、地域団体等と民間企業との連携が重要であるが、地元企業だけでは資金や人員等が不足している場合もあることから、大企業との連携を図るため、企業訪問活動を行っている県外事務所等で、地域貢献活動の協力を依頼する等、地域団体等と大企業との連携について検討すること、の３つを提言しようとするものである。
・　これらの提言について、ニュアンスの付け方とか、付け加えたほうがいいこと、その他、皆様から御意見を頂戴したい。

●竹内健二委員

・　項目の３番が、要は大企業に協力してもらえるようにしましょうということだと思うが、読んでいてすんなりとは理解できない。

●須田紘彬部会長

・　分かりやすいのは龍角散（株式会社龍角散）が美郷町や八峰町の地域と連携している事例であるとか、ＪＡＬ（日本航空株式会社）が美郷町と連携して実施している事業の事例などではないか。
・　県としてはワーケーションを進めていく中で、大企業の協力を得られないかといった視点になってくると思う。
・　項目の３番に追加する視点としては、財源を捻出するために例えば日本財団（公益財団法人日本財団）に何か提案するとか、予算を増やすためにそうしたことができたら良いのではないか。ほかにも、例えば鳥取県では、移住関係の財団の資産を取り崩して、年間数千万円ずつ地域づくり関係の事業経費に充てて行くこととしている事例がある。地域づくり関係の予算を増やすためには、国の支援を得るか、大企業系の民間財団を含め、国内外の財団からの支援を得るといった、地域において不足している資金や人材を外部から引っ張ってくる施策が必要ではないか。
・　ほかには、提言に盛り込むかどうかは別にして、東京では与えられた娯楽を楽しむのが一般的であるが、地方では空き地で何をしようかと考えることが楽しみであり、地方の魅力だと思っているので、それを伝えるのは難しいことだが、そうしたことを伝えられたら良いのではないか思っている。

●能登祐子委員

・　地域づくりにおいては、若者の力ももちろんだが、女性の力も欠かせない。そうした内容を盛り込めないか。

●加藤未希委員

・　項目の３番について、大企業の協力が得られることはありがたいことだが、地域づくりには地元企業からの応援、支援を得ることが欠かせない。少しずつ分担してもらう形でも良いので、そういった視点を盛り込むべきではないか。

●須田紘彬部会長

・　関係人口との連携に関することを盛り込んではどうか。
・　項目の１番について、「民間主導で行うべき」とあるが、「べき」という表現は強すぎないか。我々委員から県への提言という意味では「べき」という表現を使ってもいいのかもしれないが、言葉としては強すぎるように感じる。

●能登祐子委員

・　「民間主導を理想とし」というような表現が良いのではないか。

●須田紘彬部会長

・　前段の「行政主導ではなく」という否定表現を外し、後段は「べき」ではなく「理想」といった表現を使うことでどうか。

【異議なし】

●竹内健二委員

・　地域づくり人材の育成に関して、私の周辺でもよく議論になるが、プレイヤーはたくさんいるが、そうした人たちをつなぐコーディネーター人材が圧倒的に不足しているという話になる。また、コーディネーター役を買って出てくれる人はいるが、その人材に対する支援が不足しており、その人が疲弊した途端に活動が停滞したり、取組が水泡に帰すことが多い。地域づくりのリーダー人材やコミュニティづくりを支援するコーディネーター人材を育成し、支援する取組を進めるべきではあるという内容を提言に盛り込めないか。

●須田紘彬部会長

・　人と人をつなげたり、異なる活動をコラボレーションする役割を担う人材の育成や、そうした活動に対する支援を提言に盛り込んではどうか。

●竹内健二委員

・　地域おこし協力隊でコーディネーター的な役割を果たしてくれる場合、数年間は地域おこし協力隊として生活が保障されるから良いのだが、その後、次の方が来なかったり、人が変わった途端に、取組が停滞したり、立ち消えになったりする。

●須田紘彬部会長

・　盛り込む項目としては、提言４に限定せず、関係人口に関する部分などでも良いのかもしれない。

●須田紘彬部会長

・　ほかに、全体を通してでも結構なので、御意見等ないか。

・　提言全体を通しての趣旨からすると、子育てをしながら地域づくり活動をコーディネートしてくれる女性という人物像が見えてくるが、グラフィックレコーディング（議論をその場で図式化して紙に描くこと）で有名な平元さん（平元美沙緒さん、秋田県在住。

徳島県出身で、現在、まちづくりファシリテーターとして活動中）がまさにそうしたことを体現している人物として思い浮かぶ。

●竹内健二委員

・　提言２の項目２番においては、経済的な余裕があればもう一人子どもをもうけたいという人たちもいるのではないかと思うので、その点を考慮せずにロールモデルを示しても響かないということもあるのではないか。そうした点を考慮したニュアンスを盛り込めないか。

●加藤未希委員

・　我が家の場合も、子どもをもう一人産みたいと夫婦間で話したときには、夫は経済的な負担についての不安を示した。高校生、大学生と進学する際にはこのくらいの教育費用が掛かるといった話をされた。やはり、現実問題として経済的な負担に対する不安は大きいと思う。

●須田紘彬部会長

・　私は、家族間の会議が重要であると思っている。大学に行きたいのであれば奨学金を自分で借りてくるのが当たり前の時代になりつつあり、大学に行きたいかどうかを含めて子ども自身がしっかりと考え、自分自身の人生を自分で選択する機会を設けることが大事ではないか。費用をまかなうのは大変だがそれでも大学に行きたいということであれば、高校での勉強にも身が入るだろうと思っている。その辺りは家族のあり方というか、家庭内教育ということではないかと思っている。

●能登祐子委員

・　教育は非常に重要である。例えば自分の住んでいる地域を好きになることも教育を通じて得られる部分もあるのではないかと思う。この前、高校生がフィールドワーク学習ということで私のところに来てくれたが、とても難しい質問をされ、今の高校生は意識水準が高いととても感心した。このあと、県外へ出て行くかもしれない高校生に対する教育はとても重要だと感じた。

●竹内健二委員

・　加藤委員から話があった事例も踏まえて、そうした夫婦間のやりとりも踏まえたロールモデルを示すと良いのではないか。

●須田紘彬部会長

・　単に状況をロールモデルとして示すのでなくて、そこに至る経緯も含めてうまく発信

できれば良いのではないかということかと思う。

・　ほかに、御意見等ないか。

【なし】

●須田紘彬部会長

・　この後は、今日の意見を採り入れた提言案を事務局と私が協議しながら作成したい。なお、皆様にメール等で提示して意見をもらう機会を設けたいと考えているが、細かい修正などについては、私に一任してもらってもよろしいか。

【異議なし】

●須田紘彬部会長

・　それでは議事の２番「その他」について、事務局より連絡をお願いする。

□事務局（加沢副主幹）

・　今後の会議の日程については、当部会の会議は今回で終了となり、第２回の総合政策審議会が１０月１６日に開催の予定である。
・　その場へ当部会からの提言案を提出し、審議会の了承を得て審議会の提言となる。
・　そのため、９月下旬を目途に当部会の提言をまとめたいので、よろしくお願いする。
・　このあと、追加意見や質問等があれば、随時、事務局の方に連絡をいただければ調整や情報提供をさせていただく。
・　事務局からは以上である。

●須田紘彬部会長

・　他に御連絡のある方はいるか。

【なし】

・　議事は以上となるので、事務局に進行を返す。

□事務局（佐々木主幹兼班長）

・　長時間にわたり、熱心に御審議を賜り、感謝申し上げる。
・　それではここであきた未来創造部次長の石黒から、一言お礼を申し上げます。

□石黒あきた未来創造部次長

・　長時間にわたり、熱心に御審議を賜り、感謝申し上げる。
・　この部会でテーマとする少子化対策、あるいは社会減対策、地域づくりについては、一人ひとりの個人の生き方に関連する。個人の価値観やニーズが多様な中で、取組の方向づけをしていくことは難しい面があったと思う。委員の皆様には御難儀をお掛けしたが、おかげさまで、たくさんの御提言いただくことができた。是非ともいただいた御提言を県の施策に生かしてまいりたいと考えている。皆様におかれては、引き続き、秋田の元気づくりにお力添えいただくことをお願いして、挨拶としたい。ありがとうございました。

□事務局（佐々木主幹兼班長）

・　以上で、第３回ふるさと定着回帰部会を終了させていただく。

以上